

7 自立活動の指導のヒント

病気の種類別に具体的な指導内容を作成して、指導すべき内容を明確にします。

《 気管支ぜん息児の場合（参考例） 》

区分 ー健康の保持ー

項目 a) 自己の病気の状態の理解

- アレルギー反応の仕組み
- 気管支の構造と機能の知識・理解
- 病状や治療法等に関する知識・理解
- 感染防止や健康管理に関する知識・理解

b) 健康状態の維持・改善等に必要な生活様式の理解

- 各種の生活様式

c) 健康状態の維持・改善等に必要な生活習慣の確立

- 各種の生活習慣の形成及び定着化

d) 諸活動による健康状態の維持

- 各種身体活動等による健康状態の維持・改善等、生活リズム調整等

☆可能な限り自己管理する力を付けることを目指し、主体的に取り組めるような指導（活動）を準備します。

《 病気理解を図るための指導に際して 》

病気について子どもを必要以上に怯えさせてしまったり、教師の理解不足のために禁止事項が増えてしまったり、してはいけないことをさせてしまったりして病状を悪化させたりすることは絶対に避けなければなりません。したがって、正確な知識を提供するだけでなく、子ども自身が病気を理解することで生きる力が湧いてくるような教育活動の一環として、自立活動に取り組むことが重要です。

◇進行性の病気理解の指導

直接、自身の生死について考え、死を受容するための心の葛藤を生むことも多く、時間をかけた個別指導が基本となります。

◇服薬や検査の継続が必要な病気理解の指導

家庭や主治医と連携し、服薬や検査の必要性についての理解を深めます。病気への負い目を感じている場合もあり、情動的な面を十分に配慮した指導を心がけます。

こころのケア



病気になった子ども自身も家族も様々な思いを抱いています。特に本人は、病気による生活規制を強いられる日々の中で、「なぜ自分だけが・・・」という思いや辛い治療や入院生活の経験などから、心が不安定になってしまう（心に傷を負う）ことがあります。

体調は悪くなさそうなのに元気がない、感情の起伏が大きいといったこと、がまんや無理をしすぎることももあり、体調を気づかう温かい言葉かけやさりげない配慮などが、子どもの心を元気づけてくれます。

また、通院や入院、家庭での体調管理などは家族（特に母親）の負担も大きいものです。病気への不安や心配はもちろんのこと、家族の生活リズムにも影響することも多々あります。併せて、病気の子どもの「きょうだい」への支援も必要なことを、関わる周囲の大人が意識していることが大事になります。

「ショック」「怒り」「悲しみ」「落ち込み」「絶望」「自責」など心が揺れながら、立ち止まりつつも歩み続ける子どもや家族の「今」の思いに、心を寄せたいものです。